

相国寺承天閣美術館

生誕 300 年記念

『伊藤若冲 展』

相国寺観音懺法を荘厳する動植綵絵 30 幅を一堂に展示

(コロタイプ印刷による複製品)

平成 28 年 7 月 1 日 (金) ~ 平成 28 年 12 月 4 日 (日) 【会期中無休】

● 錦市場が生んだ天才画家「伊藤若冲」

現代のアートやデザインに多大なる影響を与えた江戸時代中期の超絶技巧の画家・伊藤若冲(じゃくちゆう)。生前の若冲は人気も知名度もありましたが明治以降忘れられがちな存在になりました。大正、昭和の時代に研究が進み、1990 年代後半以降その超絶した技巧や奇抜な構成などが再評価されるようになりました。特に、アメリカ人収集家ジョー・プライスのコレクションにより飛躍的にその知名度と人気が高まりました。

2000 年に京都国立博物館で開催された大回顧展でその人気は急上昇し現在もそのブームは続いています。今では商品のパッケージのデザインなどに採用されるなど、若い世代を中心に絶大な人気を誇っています。

そんな若冲は今年で生誕 300 年。4 月 22 日(金)から上野の東京美術館で「生誕 300 年記念 若冲展」が開催され、上野公園の美術館周辺に、あきれほどの長蛇の列ができました。炎天下、列の最後尾は 4 時間待ちで、ようやく入場できても列はさらに館内へ続き、どうにかたどり着いた作品の前は大混雑で観賞どころの騒ぎではなかったようです。

● 若冲の生涯

1716 年、八百屋や魚屋が軒を連ねる京の台所・錦市場の青物問屋の長男として生まれます。今でいう八百屋の家に生まれたことは後の彼の作品に少なからず影響を及ぼすこととなります。

父が没した後家業を継ぐこととなります。若冲は内向的な性格だったらしく享樂的な生活を送るようなことはなかったようです。彼には絵を描くことが人生の喜びの全てで、芸事にも酒にも女遊びにも全く興味がなかったそうです。俗世への欲のみならず、家業である商売にもあまり関心が持てず、頭の中は常に絵筆を握りたいという思いが強かったようです。

若冲は家業を続けながら 30 歳を過ぎてから絵を本格的に学び始めました。時は江戸時代中期、若冲は当時画壇の主流だった狩野派の門を叩きます。しかし、狩野派を学んでも自分の画法を築くことは出来ないと考え独学で腕を磨くことを心に決めます。幸い京都には主に中国の名画を所蔵する寺が多いので、模写の為にあらゆる寺社に足を運びました。絵にかける思いは募りいつしか若冲は店を他の者に任せて丹波の山奥にこもります。40 歳を目前にして弟に家業を譲って隠居し、弟はそれを受け入れ兄を経済面で支え続けました。

● 絵を学ぶために鶏を飼う

画業に専念出来るようになってからは 1,000 枚とも言われる模写の日々が続きます。やがて、若冲は「**絵から学ぶだけでは絵を越えることができない**」と思うようになります。実物を描くことで真の姿を表現しようと思いつくのです。

生き物の内側に「**神気**」（神の気）が潜んでいると考えていた若冲は、**庭で数十羽の鶏を飼い始めます**。しかし、一時もじっとしていない画材を写生することはすぐに出来ず鶏の生態をひたすら観察し続ける日々が続きます。朝から晩まで鶏とにらめっこです。1 年が見尽くしたと思った時おのずと絵筆が動き出したそうです。その後鶏の写生は 2 年以上続けました。その結果鶏だけでなく、草木や岩にまで「**神気**」が見えるようになり**あらゆる生き物を自在に描けるようになり**ました。

この頃から、若冲は代表作となる「**動植綵絵（さいえ）**」シリーズに着手しています。身の回りの動植物をモチーフに描き、完成まで 10 年を要した同シリーズは全 30 幅の大作となりました。そしてその大作はその後日本美術史における花鳥画の最高傑作となりました。ちょうどその頃京都では 12 歳年下の写実主義で有名な**天才画家・円山応挙**が頭角を現します。応挙の人気は絶大で門弟 1,000 人という円山派が京の都の画壇を席卷します。一方、若冲は対象的に一匹狼の画家で朝廷や政権にコネもなく**孤高の天才画家**として知られていました。

1788 年、72 歳になった若冲を突然「**天明の大火**」が襲います。この大火事で彼の家も画室も焼失し大阪へ逃れました。私財をすべて失って生活は貧窮し 70 歳を過ぎて初めて生活の為に絵を描くほど貧乏になってしまいました。74 歳からは京都に戻り、深草の石峯（せきほう）寺の門前に庵をむすんで隠棲しました。そして不幸は重なり、76 歳の時にずっと援助してくれていた弟が他界してしまいます。

若冲は京の都で円山応挙と天才画家の名を二分するほど高名な存在でした。しかし晩年の若冲の日々は悲しみに満ちたものになってしまいます。ただ元来享樂的な志向がなかった彼にとって貧困は苦にならず、むしろ悠々自適であったと伝えられています。

最晩年の若冲は、石峯寺の本堂背後に釈迦の誕生から涅槃までの一代記を描いた**石仏群・五百羅漢像**を築いています。若冲が下絵を描き石工が彫り上げた五百羅漢像は、住職と妹の協力を得て約 10 年がかりで完成したものです。境内の山がちな山林の敷地に現在もところ狭しとさまざまな表情をした羅漢さんを見物することが出来ます。

1800 年、84 歳の長寿で大往生するまで生涯独身を貫きひたすら**絵を描くことにエネルギーを注ぎ続けた人生**でした。

現在、石峯寺の境内には若冲の墓があります。また若冲のゆかりのある相国寺にも墓があり、藤原定家、足利義満などそうそうたる歴史上の人物と並んで眠っています。

● 相国寺との深いつながりと皇室との関係

江戸時代の画家・伊藤若冲は相国寺の僧・大典（だいてん）と親交があり、若冲作品が相国寺に伝わります。「若冲」の号も、大典が老子の文章から与えられたものだと言われています。

若冲が 10 年の歳月を費やし動植物を描いた「**動植綵絵**」30 幅は綿密な描写、画絹や絵具

にも注意を払った最高傑作です。鶏、魚介類、昆虫、草花が多種、濃密に色鮮やかに描かれています。「動植綵絵」「釈迦三尊図」3幅は、伊藤家と若冲自身の永代供養を願って相国寺に寄進されています。

以後、法要に際して「釈迦三尊図」「動植綵絵」は掛けられています。明治時代の神仏分離令後の廃仏毀釈により寺の寺領が没収され窮乏に陥ってしまいます。この時相国寺は「動植綵絵」と寄進状、売茶翁の一行書は明治天皇に献納されています。

なんとか寺の存続を守るためにと差出した貴重な寺宝の下賜金1万円により相国寺の境内は守られたといえます。その時の経緯から現在も若冲の絵の一部は皇居で大切に保管されています。

● 動植綵絵の魅力

約10年の歳月をかけて制作された、生命の「神気」を描いた30幅の花鳥画。濃密な空間、埋め尽くされた溢れる命、生命の息吹を感じる力強い作品です。画材の細部に注がれる熱い視線、高い描写力と鮮やかな極彩色で、鶏、昆虫、魚介類、草花が描かれています。生きとし生けるものすべてに仏性が宿るとする「山川草木悉皆仏性」の思想を、観音経にある「三十三応身」になぞらえて描き出したと考えられています。忠実に描かれた写生でありながら、デザイン性を持ち合わせているのも若冲の作品の特徴です。模写という型から飛び出し実物以上に写実感のある型破りな絵画手法は天才画家の余裕を感じさせるものがあります。どの絵も最高級の画材で描かれており、250年ぐらい経っているにも関わらず色あせていません。

若冲は全幅を相国寺に寄進しましたが、明治時代に明治天皇に献上されて以降皇居に所蔵され、現在も宮内庁が管理しています。

01. 芍薬群蝶図 (しゃくやく ぐんちょうず) : 芍薬の花に蝶達が遊ぶ。
02. 梅花小禽図 (ばいか しょうきんず) : 咲き誇る梅の花に戯れる小鳥達 (鶯?)。
03. 雪中鴛鴦図 (せっちゅう えんおうず) : 雪の降り積もる冬の川辺に暮らす鳥達を描く。鴛鴦の番 (つがい) に雉鳩、ほか。
04. 秋塘群雀図 (しゅうとう ぐんじゃくず) : 稗の穂が実る秋の野に空に飛び交う無数の雀達。
05. 向日葵雄鶏図 (ひまわり ゆうけいず) : 向日葵に雄鶏。
06. 紫陽花双鶏図 (あじさい そうけいず) : 紫陽花に鶏の番。
07. 大鶏雌雄図 (たいけい しゆうず) : 堂々たる雄鶏と小さな雌鶏。
08. 梅花皓月図 (ばいか こうげつず) : 咲き誇る梅の花と名月。
09. 老松孔雀図 (ろうしょう くじゃくず) : 松の古木の深い緑に牡丹の花の紅と白、その中で輝くように立つ白い孔雀。
10. 芙蓉双鶏図 (ふよう そうけいず) : 咲き乱れる芙蓉の花に遊ぶ鶏の番。
11. 老松白鶏図 (ろうしょう はっけいず) : 古松の枝に白い鶏の番。
12. 老松鸚鵡図 (ろうしょう おうむず) : 松の老木に鸚鵡が 3 羽。
13. 芦鷺図 (ろがず) : 芦原の岸に佇む鷺鳥。
14. 南天雄鶏図 (なんてん ゆうけいず) : 赤い実のなる南天を背に黒い雄鶏が猛る。
15. 梅花群鶴図 (ばいか ぐんかくず) : 梅の花と丹頂の群れ。
16. 棕櫚雄鶏図 (しゅろ ゆうけいず) : 棕櫚の森に黒と白 2 羽の雄鶏。
17. 蓮池遊魚図 (れんち ゆうぎよず) : 蓮池に泳ぐ魚の群れ。鮎 9 匹に追河 1 匹。
18. 桃花小禽図 (とうか しょうきんず) : 花咲く桃の木に遊ぶ白い鳩達、小鳥達。
19. 雪中錦鶏図 (せっちゅう きんけいず) : 雪に包まれる牡丹と松と 2 羽の錦鶏。
20. 群鶏図 (ぐんけいず) : 13 羽の雄鶏。
21. 薔薇小禽図 (ばら しょうきんず) : 薔薇の紅白に小鳥が 1 羽。
22. 牡丹小禽図 (ぼたん しょうきんず) : 一面に咲き乱れる牡丹と 2 羽の小鳥。
23. 池辺群虫図 (池辺群蟲図) (ちへん ぐんちゅうず) : 瓢箪がたわわに実り、蛙、蛇、井守、蜘蛛、蜻蛉、蝶など、虫たちが集う池。
24. 貝甲図 (ばいこうず) : 磯はちりばめられたような貝づくし。「貝甲」は「貝殻」の意。
25. 老松白鳳図 (ろうしょう はくほうず) : 旭日と、老いた松に留まる白い鳳凰。
26. 芦雁図 (ろがんず) : 冬の芦原に落雁。
27. 群魚図 (蛸) (ぐんぎよず たこ) : 海を泳ぐ魚介の図。蛸に甘鯛、鰯、鰹、鱈、等々。
28. 群魚図 (鯛) (ぐんぎよず たい) : 海を泳ぐ魚介の図。真鯛に虎河豚、鰻、甲烏賊、撞木鮫、等々。画左下のルリハタの体とヒレには、日本で現在確認されている中で初めて紺青が使用されている。
29. 菊花流水図 (きくかりゅうすいず) : 白い菊の花と葉の蒼、流れる清水。
30. 紅葉小禽図 (こうよう しょうきんず) : 紅葉の枝に遊ぶ 2 羽の青い鳥 (大瑠璃)。